

「わたしのだいじなおとうと」

福正寺 1年 まつお かすみ

わたしには、二さい十一かげつのおとうとの、としひろがいました。としは、ごはんをたべているときに、きゅうにゲーゲーしてびょういんへいきました。わるいところがわかったのでしゅじゅつをしました。ほんとうにしゅじゅつをしたのかなとおもうくらい、目があかずつぶったままでした。おかあさんに「なんでとしは、目をあけたりあそんだりしないの。」ときくと、もうあそんだりできないだよといいました。わたしは、なみだがポロポロでてきました。そしてとうとう三月十九日のよるになりました。でも、わたしは目があかないときも、せいっぱいいきたんだなあということがよくわかりました。

びょういんからかえってくると、おふとんにねかせてあげました。手をさわってみると、とてもつめたかったです。おつやの日になると、としはしろいかおをしていました。としがなくなったのは、みとめられなかったけど、ごじゅうしょくさんのおきょうやおはなしをきくと、こころがあんしんしました。

人は、じゅんばんにびょうきになっていくとおもっていたけど、じゅんばんじゃないんだなあということと、としのからだは、なくなってみえなくなったけど、ほとけさまになったんだなあということととしにおしえてもらいました。また、ねえーねえにいろんなことをおしえてね。としのことは、ぜったいにわすれないよ。



「いのち」

京都女子大学附属小学校 2年 樋口 公望

ぼくのおじいちゃんは、ぼくがようち園の年中の時になくなりました。ぼくがびょう気の時は、心ぱいしてだいじょうぶか、と言ってくれました。おじいちゃんが元気なときは、おばあちゃんとりよ行へつれて行ってもらいました。ぼくは、そんなおじいちゃんがすきでした。

おじいちゃんがびょう気になって入いんした時、お見まいに行きました。おじいちゃんは、しんどそうにベッドの上でねていました。ぼくは、また元気になってほしいなあ。と思いました。心ぱいになったので、なんどもお見まいにつれていってもらいました。だんだんとびょう気がなおって、たいいんすることができました。でも、三週間してきゅうに夜中になりました。すぐかけつけましたが、おじいちゃんはなくなってしまいました。ぼくは、まだ会いたいの、もう会えないのかと思ってないてしまいました。みんなもなくてました。しばらくしてみんなで体をていねいにふいてきえさせてあげました。おじいちゃんは、ねているようでまだ生きているみたいでした。なくなっているのがうそみたいでした。

あれから三年たって、まだおじいちゃんが生きているようにかんじます。ぼくは、毎日ぶつだんにおまいりをしています。今日あったことや思ったことを話しています。おじいちゃんは、がんばったね。と言ってくれているように思えるからです。

これからも、おじいちゃんの気もちや思いをわすれずいろんなことを学んでいきたいです。

「カブトムシとの出会い」

国府台女子学院小学部 3年 山本 怜奈

台風で風が強かった次の日、カブトムシがベランダにいました。そのカブトムシは、右の足がなく、せ中に歯形がついていました。わたしは、そのカブトムシをかって、元気になったら、森に帰してあげようと思いました。さっそく、カブトムシのし育にひつような物をホームセンターで買いました。し育ケースの中に、かれ葉とスイカとカブトムシのえいようゼリーをおき、カブトムシを入れました。スイカに口をつけてあげたら、スイカをわたしがリンゴジュースをのむようにすっていました。でも、しばらくすると、のまなくなりました。えいようゼリーは、すぐにあきてしまったか分からないけど、あまりのみませんでした。次の日、かい中電とうをし育ケースの上におくと、カブトムシは、かい中電とうを朝日とかんちがいた様子で「おはよう」と言っているようでした。きのうより、少し元気になりました。三日目、だんだん元気になってきました。ケースの中でよく動くようになりました。もう少し元気になったら、森に帰そうと思いました。四日目の夜に、カブトムシは、水っぱい物を出して、ゴソゴソ動いていました。五日目の朝、わたしが学校に行く時、「おはよう」と声をかけても、かい中電とうをし育ケースの上ののつけても、し育ケースをゆすつても、「おはよう」とも言わずにひっくり返って動かなくなっていました。しんでしまったのです。はじめは、角がおれて、足が一本ないカブトムシを元気になるまで育てようと思ったけれど、それは本当によかったのでしょうか。カブトムシは、し育ケースの中でしんだ方がよかったのか、それとも、ベランダで水をのみながら、しんだ方がよかったのか分かりません。でも、けがをして弱ったのを見るとほっとけませんでした。そのままにしておくとなりの犬がベランダに来て、カブトムシをおもちゃみたいに遊んでぼろぼろになってしんでしまうかもしれません。

「はじめがあればおわりがある。」とわたしのお母さんは、言っていました。カブトムシも、たとえ元気になって森に帰したとしても、かならず、いつかはしぬことになると思います。わたしがかっているネコも、メダカもいずれしぬんだなあと思うと、大事にしようと思いました。わたしは、きっとカブトムシは、仏さまからのおくりものかもしれないと思いました。わたしに色いろな事を考えてもらうためにここに来たのかもしれないと思いました。カブトムシから学んだ事は、「いのち」は、とても大事で、その時を大事に、一どしかない出会いを大切にしなければいけないという事です。これから、それぞれのいのちを大切に考えようと思いました。



「手紙」

国府台女子学院小学部 4年 栗林 愛子

努力して報われることもあります。いくら努力しても、報われないこともあります。でも大人は、努力すれば必ず報われると言います。きっと大人は努力して、いつも報われてきたから、努力しても報われない悔しい気持ちは、わからないのです。泣くのは弱虫なのでしょうか。・・・中里真美。

まみちゃんは、幼稚園からの友達。背は高く、目は大きく、色は黒い。お母さんは南の国の人。お父さんはいない。小さな声で、ゆっくり考えながら話す。動作もゆっくりだ。しかし、手紙の中でのまみちゃんは、はっきりと自分の考えを言う。私はその長い手紙を長い時間かけて読む。

卒園してからは、体操クラブ、バザー、ミニキャンプで会うだけ。そこでは、他に友達がいるから、あまり話せない。だから、お互いに手紙を書く。ケイタイやメールもあるけれど、手で文字を書き、その手紙を読むのは楽しい。また、悲しいことを手紙にして、封をすると、すっきりした気分になる。ポストに入れられない手紙も、たまにある。

第56回全国児童生徒作品展 大遠忌記念賞 作品 【作文・詩の部】

昨年まみちゃんからの手紙には、『毎日がつらい、ひとりでさびしい、転校したい、生きるのが嫌になった』、こんなことばかり書いてあった。読んでいて、私も胸が苦しくなる。『汚いから、学校に来るな』なんて、ひどい言葉は、心を傷つける。仲間はずれ、いじめ、差別、ひとりぼっちのまみちゃんを想像して、とても心配した。まみちゃんは、私の大好きな大切な友達だ。でも、まみちゃんは、だれからも、かわいそうと思われたくないはずだ。私はそう思う。

私にできることは、手紙を書くこと。まみちゃんのいいところ、楽しい思い出をたくさん書く。遠足や運動会で、いっしょのお弁当。シロツメ草の首飾り。背中に入ったアリを出してくれた。いちばんの思い出は、私がキジバトの巣を見つけ、イチジクの木に登り、降りられなくなったときのこと。足をかける枝が見あたらない。幹にしがみついて、途方に暮れていた。風で大きな葉がざわざわして、だんだん心細くなる。そこへどこからか、まみちゃんが救助に来た。何も言わずに、どんどん登る。すぐ下まで来た。私の顔を見上げ、にこっとした。まみちゃんの肩に足を乗せ、やっと地上にもどれた。

今年の秋、まみちゃんに、アジアフェアに誘われた。久しぶりに、元気なまみちゃんを見て安心した。きっと自分で解決したのだろう。まみちゃんは強いのだ。会うまでは、話すことがたくさんあったのに、二人で買い物をして、アジアフードを食べて、一日があっという間に終わってしまった。

まみちゃんが夏休みに旅行した、お母さんの国。空と海がきれいで、果物がおいしい。いつかいっしょに行きたいね。・・・栗林愛子。



「出会いで続けること」

国府台女子学院小学部 5年 岡崎 仁美

わたくしの学校の運動会では、五・六年生が八百メートル走に出ることになっています。今年の運動会は六月に行われました。予行練習の最後に予選があり、二十位までの人が当日の決勝戦に進むことができます。五年生になった今年、わたくしは予選で何位かも分からずに、ゴールもできないままと中で止められてしまい、とてもくやしい思いをしました。そこで、来年こそは八百メートルの予選で選ばれたいという気持ちがわいてきました。

八月の終わりから、母と一しょに走るようになりました。母は自転車で後ろから応えんしながらついて来てくれます。何日か走ってから、地図でどこからどこまでが八百メートルかを調べ、タイムを計って走るようになりました。二学期が始まってからは、学校から帰ってきた後に走っていますが、宿題が多かったり、都合がよくない時や、雨の日は休みます。

家から少しはなれた自転車屋さんでスタート地点で、と中に坂道もあり、スーパーマーケットがゴールです。走った後のわたくしはヘトヘトになって、スーパーマーケットの前にあるベンチで一休みしていると、時々スーパーマーケットの入り口にリードでつながれている犬を見かけます。わたくしは、犬が大好きなので、近づいて見ていると飼い主さんが買い物から犬の所へもどって来られて、「犬を飼っているの？」

とわたくしに声をかけて下さって、犬のお話をして、顔見知りの方が多くなり、走ることが楽しくなってきました。

家に帰ると中には、お豆腐屋さんがあります。走るようになってからは、ここで豆腐を買うようになり、お豆腐屋さんともすっかり顔なじみになりました。

「今日もがんばって走っているのね。おまけに油あげ！」

とサービスして下さったり、応えんして下さったりして、明日も走ろうという気持ちになります。

また、近所に住む前のたん任の先生が、走っているわたくしを見かけられたようで、「お母さんと走っているでしょう。すごいね。」と学校で言われた時は、とてもうれしかったです。

何かを始めると人との出会いがあって、目標をもって何かを続けていくには、自分の思いだけでは

第56回全国児童生徒作品展 大遠忌記念賞 作品 【作文・詩の部】

なく、出会った人や周りの人の言葉のささえが大きなはげみになると思いました。来年の運動会が秋に行われることになるのなら、あと一年。毎日少しの練習ですが、がんばって続けていって、成果が出てくれることが今の夢の中の一つです。



「私のひいおばあちゃん」

国府台女子学院小学部 6年 伊藤 由莉

私と妹とお母さんと、おばで今、老人ホームにきています。エレベーターで二階に上がり、一番おくから二番目の部屋のカーテンを開けてみると、そこには、いつもニコニコ顔のひいおばあちゃんが私たちを出向かえてくれます。ひいおばあちゃんは、きまって、私にサイコロ型のキャラメルをしわしわの手に持ち、

「よくきたね。」

と満面の笑みで私たちを待っていてくれるのです。そのひいおばあちゃんのやさしい笑顔は、いつもキラキラしていて、私がテストの点数が悪くて、落ち込んでいる時や、お母さんにおこられて、しょんぼりしている時に、私をほっとさせてくれます。

私のひいおばあちゃんは、数年前に足こしが悪くなってしまい、この老人ホームに入りました。私はなんだかひいおばあちゃんが、かわいそうでしかたありませんでした。それでもひいおばあちゃんは、いつも笑顔で、

「ゆりとかなが毎回来てくれるから平気だよ。」

と、いつもの笑顔で言ってくれます。

でも、その私をかわいがってくれたひいおばあちゃんが、突然、夜中に具合が悪くなってしまい亡くなってしまいました。八十九才でした。ひいおばあちゃんは、私にいつもこう言ってくれました。

「百さいまで元気ががんばらなきゃね」

と、いつも約束していたのに・・・お母さんはその日の夜中、おばから連絡がきて、夜中に病院に行ったそうです。そして、朝起きてみたらお父さんが、

「おばあちゃんは、昨夜に亡くなってしまったんだよ。」

と、悲しそうな顔で言いました。その時私は本当にショックで、しばらくの間、頭の中が真っ白でした。この間会った時はあんなに元気そうだったのに・・・おそう式の時、私はおかんに入ってしまったおばあちゃんの、とても幸せそうな顔を見て、

「おばあちゃん、今まで本当にありがとう。私、いい子になるね。」

と言って、おばあちゃんの手をぎゅっとにぎりました。その手は本当につめたかったです。

私は今でもおばあちゃんが生きていると思ってしまいます。もっと一緒にいてあげればよかった・・・後悔の気持ちでいっぱいです。この時私はつよく思った事があります。人間は永遠に生きられるものではありません。必ず終わりがあるのです。だから私は大切な人と生きる時間を、これからは、もっと後悔しないように大切にしていきたいと思います。



「出会いという幸せ」

敬愛中学校 3年 尾首 安耶

時間がある時、暇がある時、常に考えるのは今この場に存在している私自身のこと。私の周りにいる皆のことをどうしても深く考えてしまう。個性豊かな人々の中で私は存在して、そして出合いを重ねて生きてきたのだと。深く、本当に深く自分の身に思い知らされるのです。大きな出会いから小さな出会いまで、私という存在が立っている理由なのだろうと思います。今というのはあつという間のもので、一秒前のことは今だったのに今では一秒は過去にすぎないということ。その過去が積み重なって今がある。その過去の中には数えきれない出会いがあり、考えれば考えるほどに嫌いな思い出も綺麗になって思い出したら笑顔になることも少なくはない。そんな今までの思い出が大切で、幸せでたまらなくて、胸がいっぱいになる中で、「出会っていいな。」と思えてくる。その思いを本気で感じたのだ。体の底まで感じた。暑さに身を通し、冷たさが身を包んだ、修学旅行での出き事で私がかっていた以上にわかった事。つらい。言葉が伝わらない。初めての海外。見知らぬ町。隣にいる友一人が頼りなのだ。周りが暗くなってきた。同じ道を何度も歩いている。近くにいるオウムが怖い。みんなに会いたい。このままみんなに会えなかったらどうしよう。二人の頬が涙で濡れた。暗い空気に当時担任だった先生の名前が消えてゆく。当たり前なんてこの人間社会にはないと思いついた瞬間でした。もうみんなに会えないかもしれないと思うと、恐ろしくて今までの事すべてが愛しくなった。みんながいてくれるという有難さを改めて理解したのだ。ああ、切りがない。どんなに掴んでも掴めないものを私は掴もうとしている。水の辛さが、鼻から口から入ってくる。体が冷たい。私はこのまま沈むのか。せつかくみんなと会えたのに、また離れてしまうのか。そんなの嫌だ。みんなとまだ一緒にいたい。目から流れた水に私は気付いていました。水から上った時のことは、私が掴もうとして生まれた泡とともに忘れない。でもあの浜での件は今でも鮮やかで、思い出したらとても悲しい。それでも、私は良かった。みんなにもう一度会えたから。罪悪感があった。みんなに許されたいとも思わない。だけど、みんなの痛い言葉より先に、みんなに会えたという喜びと幸せが私の胸を引き裂いてしまいそうだったのだ。こうまで思える人々と出会い、今日この日までこの人達と人生を紡いで来た。これから先の未来、もっと様々な人と出会うのだろう。だけど、未来の事はあまり考えたくはない。未来の友より今ある友の方が大切だと思うから。そう思える友が、今私の周りに大勢いるから。今までの出会い一つ一つが私の人生に光を射してくれている。その光がどれだけ輝いているか、きっとみんなは知らない。私のこの気持ちもみんなにわかるはずがない。みんなに伝えたいこと。それは、「ありがとう。」何十回、何百回のありがとうを言っても一つだって何も変わりはない。「ありがとう。みんなに出会うことができたからこの気持ちを知ってるの。みんなと出会えたからこんなにも幸せなの。ありがとう。ありがとう。」この気持ちを伝えたくてまだ足りない。それくらい、私はみんなに幸せにしてもらっています。「出会っていいな。」心からそう思える友に出会い、今までをやってきた。「こんな日が夢の様に続けば。」そう願っていきたい。

